

1 1 Risaia del Duca (リサイア・デル・ドゥーカ)

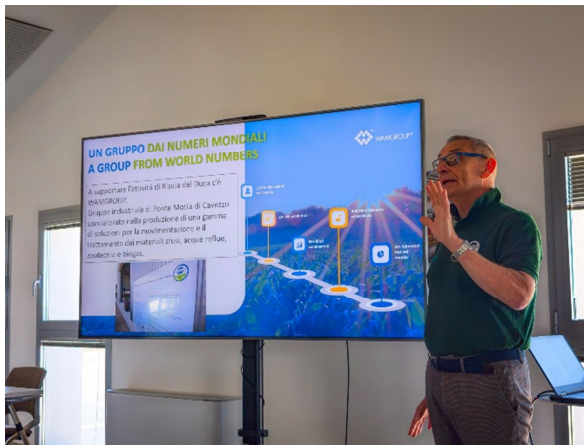
【日 時】 5月10日(土) 15:15~16:30

【場 所】 Risaia del Duca (リサイア・デル・ドゥーカ)

【対 応 者】 ①エルマーノ・ジアコミン (Ermanno Giacomini) 施設責任者
②クリスティーナ・セバリン (Cristina Severin) バムグループ広報
担当 他

(1) 概要

Risaia del Duca (リサイア・デル・ドゥーカ) は、イタリア・エミリア＝ロマーニャ州モデナ県サン・フェリーチェ・スル・パナーロに位置する農業法人である。伝統と革新を融合し、持続可能な農業を実践するモデルファームとして知られている。



(2) 主な特徴

①高品質な乳製品の生産

Risaia del Duca は、イタリアを代表するチーズ「パルミジャーノ・レッジャーノ」の製造に用いられる牛乳を生産している。牛の飼育には飼料の段階から割合が決められているなど厳格な衛生管理と福祉に基づいた飼養方法が採用されており、品質の高い乳製品生産を可能にしている。

②環境に配慮した農業

同農場では、化学肥料や水の使用を抑えた持続可能な農法を導入している。また、農業副産物の再利用や牛の堆肥などによる再生可能エネルギーの活用を通じて、循環型農業の実現をめざしている。

③研究および教育への貢献

複数の大学や研究機関と連携し、ドローンを用いた育成状況判断など農業技術の研究開発やイノベーション



に積極的に取り組んでいる。また、次世代農業人材の育成にも注力しており、研修や教育プログラムの提供を行っている。



(3) まとめ

Risaia del Duca は、伝統的な農業技術と現代的なイノベーションを融合させた先進的な農業モデルである。環境保護、動物福祉、教育、そしてジェンダー平等といった多角的な視点から持続可能な農業を実践しており、国内外から注目を集めている。



1 2 Ziosi Luca 農園（ツィオージ・ルカ農園）

【日 時】 5 月 11 日（日） 12：30～15：00

【場 所】 ツィオージ・ルカ農園

【対 応 者】 Ziosi Luca（ツィオージ・ルカ）と家族

（1）基本情報

- ・ 事業名：ZIOSI LUCA（個人名義の農業経営体）
- ・ 従業員数：約 3 名（2025 年時点）
- ・ 主な生産物：野菜類およびメロン類（果菜）



（2）地域的背景：エミリア＝ロマーニャ州の農業環境

Ziosi 氏の農場があるボローニャ県サンタガタ・ボロネーゼは、イタリア北部に位置し、エミリア＝ロマーニャ州に属する。

この地域は肥沃な平野を持ち、伝統的農業と先進技術の融合が進んでいることで知られている。

・ 土壌・気候条件

ポー川流域の平野部に位置し、水はけが良く、野菜や果菜類の生産に適した土地である。

・ 主な農産物

レタス、トマト、メロン、ブドウ、小麦など。

（3）先進的農業技術との関連性

個人の農業経営体ながら周辺の研究機関やテクノロジー企業からの依頼による種子の遺伝子組み換え品の育成なども手掛けている

※EU 諸国などでは食品用に遺伝子組み換え植物を育てることは禁止されているが、薬品や工業用などの場合は禁止されていない

● 関連研究・企業

- ボローニャ大学：農業食品科学技術部門において果実の品質や植物ホルモン研究を実施。
- Biolchim：植物用バイオスティミュラント製造企業。

(4) まとめ

Ziosi Luca 氏の農場は、地域密着型の小規模農業経営体として、地元経済と食料供給に貢献している。エミリア＝ロマーニャ州の農業革新の波を受け、将来的には以下のような展望が考えられる。

- 精密農業の導入による収量・品質向上
- 有機農業や地産地消モデルへの移行
- 地域ブランドとの連携によるマーケティング強化



1.3 Oasi di Manzolino (オアジ・ディ・マンゾリーノ) 自然保護区

【日 時】 5月11日(日) 15:30~16:30

【場 所】 Oasi di Manzolino (オアジ・ディ・マンゾリーノ) 自然保護区

【対 応 者】 ラザロ・スパランツァーニ高校卒業生、通訳

(1) 概要

Oasi di Manzolino (オアジ・ディ・マンゾリーノ) は、イタリア北部エミリア＝ロマーニャ州のモデナ県とボローニャ県にまたがる湿地帯の自然保護区である。本地域は、Natura 2000 ネットワークに含まれており、特別保護区 (ZPS) および地域重要性地域 (SIC) に指定されている。バードウォッチングや自然観察の場として、地域内外の自然愛好家に親しまれている。



(2) 地理と環境

①所在地

本オアシスは、カステルフランコ・エミリアとサン・ジョヴァンニ・イン・ペルシチエートの間に位置し、総面積は約 326 ヘクタールである。地形は主に湿地帯で構成され、人工的に造成された池や葦原、水路などが点在している。



②成り立ち

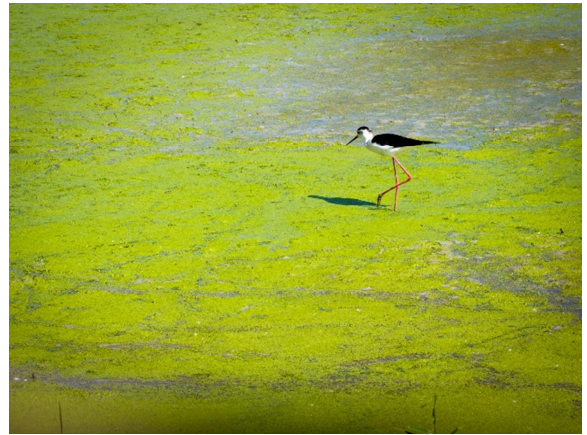
ティヴォリ池 (Vasche di Tivoli) は 1960~70 年代に養殖目的で造成されたが、現在では野生動物の生息地として再生されており、自然生態系の再構築に成功した事例とされる。

(3) 動植物の多様性

①野鳥

Oasi di Manzolino はエミリア地方で最も重要なバードウォッチングスポットのひとつである。観察される主な野鳥には次のような種が含まれる：

- ・ セイタカシギ (Black-winged Stilt)
- ・ カワセミ (Common Kingfisher)
- ・ ムラサキサギ (Purple Heron)
- ・ サンカノゴイ (Great Bittern)
- ・ チュウヒ (Western Marsh Harrier)
- ・ ズグロサギ (Black-crowned Night Heron)
- ・ サカツラガン (Garganey)
- ・ シロトキ (Sacred Ibis)



観察は特に春と秋の渡りの時期に盛んである。

②その他の動植物

鳥類以外にも、以下のような希少種が確認されている：

- ・ ヨーロッパヌマガメ (*Emys orbicularis*)
- ・ コビトウナギ (*Cobitis taenia*)
- ・ パダナ平原固有の魚類 (*Rutilus pigus*)
- ・ 湿地性の蝶「*Lycaena dispar*」
- ・ リノロフス属のコウモリ類 (大・小)
- ・ 多様な湿地植物群落

これらの種は、ヨーロッパ規模での保全対象となっており、本地域の生態的価値を高めている。

(4) 観光

観察小屋や木製の遊歩道が整備されており、快適な観察環境が提供されている。撮影や自然観察、学習プログラムに適している。

(5) まとめ

Oasi di Manzolino は、湿地生態系の保全と自然教育の拠点として重要な役割を果たしている。豊富な野鳥と希少な動植物を観察できる環境は、自然観察や環境教育、観光において高い価値を持っており、今後も持続可能な形での活用と保護が期待される。



1 4 Lazzaro Spallanzani (ラザロ・スパランツァーニ) 高校

【日 時】 5 月 12 日 (月) 7 : 45 ~ 13 : 00

【場 所】 Lazzaro Spallanzani (ラザロ・スパランツァーニ) 高校

【対 応 者】 ヴァドルッチオ副校長、マルシヤス副校長、サルヴィオーリ カステル
フランコ・エミリア教育担当議員、カッピ氏・カスラ氏、マルティノ氏
(西条農業高校との交流プログラム担当者)

(1) 学校の概要

- ・ 正式名称 : Istituto Lazzaro Spallanzani
- ・ 所在地 : エミリア＝ロマーニャ州カステルフランコ・エミリア
(Castelfranco Emilia) , イタリア
- ・ 設立年 : 1962 年
- ・ 施設概要 : 3 キャンパス体制 (カステルフランコ・ヴィニョーラ・モントムブ
ラーロ)
- ・ 学科・専攻 : 農業、食品科学、環境科学などの理系分野に特化、又、ソムリ
エ・シェフコースも新しく設立
- ・ 教育方針 : 実践的な学習と持続可能な開発 (SDGs) への対応を重視。生産か
ら加工、販売までの一貫教育を実施
- ・ それぞれの特徴

カステルフランコ・エミリア校

- ・ 北イタリア最大の学校農場を保有
- ・ パルミジャーノ・レッジャーノを主な生産品としている
- ・ ソムリエ・シェフコースは本校にある学科

ヴィニョーラ校

- ・ サクランボ産地として有名
- ・ 完全有機栽培を行っている

モントムブラーロ校

- ・ 標高 800m の山中に位置する
- ・ 薬草の生産及び蒸留によってエッセンシャルオイルの抽出・販売を
行う地域唯一の学校



(2) 教育内容と研究活動

ラザロ・スパランツァーニ高校は、以下のような革新的な教育活動を実施している。

- **持続可能な農業教育**：スマート農業、水耕栽培、自然資源の有効活用などを中心とした授業
- **実践的学習環境**：校内に農場や水耕栽培設備を設置し、学生が実際に作物を育てながら学ぶ形式を採用
- **研究活動**：未利用資源を活用した農業技術や、環境負荷の少ない生産方式の開発に注力



(3) 国際交流活動

ラザロ・スパランツァーニ高校は、国際的な視野を持つ人材の育成を目的に、以下のような交流活動を行っている。

①日本との姉妹校提携

広島県立西条農業高等学校と姉妹校関係を締結

②交流事例：

- 2024年5月、西条農業高校を訪問し、未来の食糧生産に関するプレゼンテーションと意見交換を実施
- 食文化や農業技術の比較を通じた異文化理解の深化を図る

③コロナ禍中の交流

コロナ禍の間も「遠隔で働き、ビデオ、プロジェクトへの参加」といった形でオンライン交流を継続していた。

④コロナ禍後の交流再開

2023年10月にコロナ禍後初の訪問があり、日本人学生が2週間滞在し、トルテリーニの作り方を学んだ。



その後、日本の代表団が訪問し、モントムブラーロ校やボローニャ大学の農学部を見学し、「未来の食、未来における持続可能な食品の栽培」に関する講義を受けた。

2024年5月には、スパランツァーニ学園の生徒たちが日本を訪問し、書道体験などの活動を行った。

(4) 学園の特筆すべき取り組みと成果

- 地域活性化への貢献

アグリツーリズムを通じて地元の特産品を観光客に売り込む為のカリキュラムに取り組んでいる

- 国際的な評価

国際チーズ大会において40ヶ月熟成パルミジャーノで金メダル

24か月と36か月においても金メダル銀メダルを獲得

- 製品販売を通じた自己資金調達

生産から加工、販売まで一貫することで得た収益を学校経営の費用に充てることで学生一人一人が経営者としての目線も育てる教育方針を行っている

- 有名シェフとの連携

世界的に有名な三ツ星レストランシェフと連携し生徒たちへの指導を行っている



15 総括：地域資源を活かした持続可能な未来

本レポートで紹介した4事例は、エミリア＝ロマーニャ州の多様な地域資源を活用しつつ、環境、教育、観光、農業経営の各面から持続可能な地域づくりに貢献している。以下のような共通点が見られる。

- ・ 自然と共生する農業・観光の実践
- ・ 教育・研究機関との連携による技術革新
- ・ 地域ブランドや文化を生かした収益モデル
- ・ ジェンダーや世代を超えた包摂性のある社会形成

これらの取り組みは、他地域においても応用可能な実践例として、持続可能な社会の構築に貢献しうる。

エミリア＝ロマーニャ州の持続可能な地域づくり

4事例に見る共通点



自然と共生



教育・研究連携



地域ブランド活用



包摂的な社会形成

※他地域でも応用可能な持続可能な社会構築への実践例

1 6 広島県農業の持続可能性強化に向けた提言

－エミリア＝ロマーニャ州の先進事例を踏まえて－

(1) はじめに

広島県においても、農業分野では高齢化・担い手不足、環境負荷、生産性の限界といった課題に直面している。イタリア・エミリア＝ロマーニャ州の先進事例を分析することで、広島県農業の持続可能性向上と農業経営の革新に活かす方策が見出される。本レポートでは、以下の3つの視点から、今後の県内施策への反映の可能性を提言する。

(2) 環境面：自然と共生する循環型農業の実践

① 化学資材削減と生態系保全

事例：Risaia del Duca（リサイア・デル・ドゥーカ）／Oasi di Manzolino

- ・ 化学肥料・農薬の使用抑制
- ・ 農業副産物の再利用
- ・ 自然保護区との連携による生態系維持

広島県への示唆

- ・ 有害物質の低減と生物多様性の保全を両立する「エコ農業モデル圃場」を県内各地域に指定
- ・ 湿地やため池の保全と教育利用の融合（里山・里海プロジェクトとの連動）

②環境教育の強化

事例：ラザロ・スパランツァーニ高校

- ・ 校内農場や水耕施設での実践学習
- ・ 持続可能な開発目標（SDGs）に即したカリキュラム

広島県への示唆

- ・ 県立農業高校における脱炭素・生物多様性に特化したプログラムの導入
- ・ 小中学校との農業・環境連携教育の強化（体験学習や地域指導員の派遣）

(3) 収益化とブランド化：地域資源を活かす高付加価値戦略

① 高品質な農産物と加工品の開発

事例：Risaia del Duca

- ・ パルミジャーノ・レッジャーノ用の高品質牛乳を安定供給
- ・ 衛生・動物福祉重視で差別化

広島県への示唆

- ・ 地元特産（レモン、かき、もち米、ジビエ等）のプレミアム化と一元ブランド戦略
- ・ GAP や有機認証の取得支援、農福連携による6次産業化

②観光資源化と販路の拡大

事例：Oasi di Manzolino／Ziosi Luca 氏の小規模農場

- ・ 自然観察や農業体験を通じた観光連動
- ・ 地産地消と直販での高収益化

広島県への示唆

- ・ アグリツーリズム型施設（農家民宿＋体験）の支援制度
- ・ JA・道の駅との連携強化によるブランド訴求と販路拡大
- ・ EU 市場を含めた輸出モデルの育成（特にオーガニック品）

（４）担い手不足への対応：少人数経営とスマート農業

①小規模経営と高効率化の両立

事例：Ziosi Luca 氏

- ・ 従業員 3 名規模でも地場農業を支える実践
- ・ 精密農業導入による労働力削減と収量安定

広島県への示唆

- ・ スマート農業機器の導入補助（ドローン、AI センサー、GPS 播種）
- ・ 小規模農家向け共同利用型設備・施設の整備（加工・出荷拠点）

②若年層と女性の参入促進

事例：Risaia del Duca の「女性による畜産」プロジェクト

- ・ 女性経営者の登用と技能伝承の支援

広島県への示唆

- ・ 女性農業者向けリーダー育成研修の実施
- ・ 若年層を対象としたインターンシップ・起業資金助成（農業版スタートアップ支援）

（５） おわりに

エミリア＝ロマーニャ州の先進的な事例は、広島県農業に多くの示唆を与える。環境保全と経済性を両立する農業モデル、教育・観光・技術の融合、担い手の多様化と少人数経営への対応など、各要素を統合的に展開することで、持続可能で強靱な地域農業の実現が期待される。

コラム② ～ストーリーやブランドに対する価値観～

パルミジャーノ・レッジャーノ、バルサミコ酢、フェラーリ、ヴェネツィア市街など、多岐にわたる体験を通じて、イタリア文化の根底にある独特の価値観に触れました。具体的には、「効率や実利重視」の日本と対照的に、イタリアでは「製品の背景や物語に価値を見出し、敬意を払う」という点です。

イタリアでは、DOP/IGP 制度に象徴されるように、製品の品質だけでなく、その起源、製法、背景にある物語が厳格に保護され、ブランド価値の源泉となっています。

パルミジャーノ・レッジャーノの乳牛管理や熟成期間、バルサミコ酢の産地限定と長期熟成、さらには熟成期間の非表示といったルールは、現代的な効率性の視点からは非効率に見えるかもしれませんが、しかし、イタリア文化においては、この「非効率性」が製品の独自性と信頼性を高め、消費者に「隠されたストーリー」として認識され、感情的な価値を生み出す重要な要素として積極的に受け入れられています。

フェラーリの「欲しがる客の数よりも1台少なく作る」という希少性戦略も、単なる機能やスペックを超えたブランドストーリーの展開であり、製品を憧れやアイデンティティを体現する存在へと高めています。

ヴェネツィアの歴史的建造物群も、過去の栄光と人々の営みが織りなす壮大な物語を体現しており、街全体がブランドと言えます。

もちろん、日本の「モノづくり」にも「匠の技」や伝統の継承といった素晴らしい側面があり、製品にもストーリーや職人の心意気は込められています。しかしながら、その「物語」を感情的価値として積極的に市場に訴求するアプローチは、イタリアと比較すると少し消極的だったかもしれません。日本における伝統工芸品はもちろん、優秀な製品においても、価格や実用性といった側面だけでなく、この「物語性の訴求」が課題と言えます。

日本とイタリアの価値観には異なる側面もありますが、「モノづくりへの敬意」や「伝統の継承」といった精神は両国に共通して存在します。日本の高品質と信頼性に加え、イタリアのように製品の背景にある物語を効果的に伝えることは、今後の日本の製品やブランドが新たな価値を創造し、国際市場での競争力を高める上で重要な視点といえるのではないのでしょうか。



17 ヴェネツィア市（ヴェネト州）

【日 時】 5月13日（火） 8：30～11：00

【場 所】 ヴェネツィア市（ヴェネト州）

【対 応 者】 Mr. Luigi Brugnaro（市長）

Mr. Morris Ceron（市長室長）、Mr. Luca Zuin（市長施策実行責任者）

Mr. Alvisa Papa（Smart Control Room ディレクター）

Mr. Francesco Vascellari（市民保護、リスクマネジメント責任者）

ヴェネツィア市と広島市は、「両市民の平和への思いを地域や国の垣根を越えて世界中に広げていきたい」という思いの元、2023年11月に平和や文化など特定の分野において交流・連携を進める合意書を交わしている。その後、食や音楽などの文化活動を通じ、交流は着実に深まっている。そこで、更なる深化の可能性について市長の意向を確認した。

また、ヴェネツィア市は、歴史的遺産と自然環境の保護という大きな使命を担いつつ、気候変動やオーバーツーリズムといった現代的な課題に直面している。さまざまな都市課題への取り組みが行われていることから、現状と課題対応について調査を行った。

（1）更なる交流の深化について（市長）

広島市との合意書提携は喜ばしいことだとし、両市の関係をさらに発展させるための重要なテーマとして、以下の点に言及された。

- ・ 広島市と合意書提携を行った背景には、故ジーノ・ストラダ氏（NGO「エマージェンシー」創設者）の存在があった
- ・ ストラダ氏は、ヴェネツィアに平和博物館を建設するという構想を持っており、市長自身も生前のストラダ氏と面会し、この博物館建設を支援することを約束していた。
- ・ この博物館は、戦争の悲惨さを伝え、平和への意識を高めることを目的とするものである。
- ・ ストラダ氏は広島にも接点があり、市長はこの構想の実現には広島側の協力が不可欠であると考えた。
- ・ 市長の任期は残り1年であり、任期中に何らかの進展を図りたい。
- ・ 広島市からの迅速な返答と積極的な協力を要請する。
- ・ なお、市長自身は親日家であり、過去に何度も日本を訪問したし、日本の天皇陛下より「金の光線にロゼットを添えた勲章」も授与された。
- ・ さらに令夫人が日本語に堪能であり、個人的にも日本との深い繋がりを感じている。

(2) 都市課題への取組について

ヴェネツィアは、その地理的特性から、高潮、地盤沈下、気候変動に伴う異常気象など、多くの自然災害リスクに晒されている。

①自然災害と環境問題への対策

○海水面上昇と高潮対策

過去 2000 年間で海水面が 2 メートル以上上昇しており、特にここ数年の気候変動の影響で、高潮の頻度と規模が増大している。これに対し、以下の対策が講じられている。

- ・ モーゼプロジェクト：国と市が協力し、ラグーンへの異常な高潮の進入を制限することを目的とした可動式防潮堤システムである。潮位を常に 1 メートル未満に維持することをめざしており、日本の企業も一部関与している。
- ・ 建物の保護：海水面上昇は建物の基礎部分を濡らし、塩害による劣化を引き起こす。ヴェネツィアの建物は木の杭の上に建てられており、常に微動しているため、硬直的な防水材は適さない。対策として、伝統的に用いられてきたイストリア石（大理石の一種）による保護に加え、建物の弾力性を維持しつつ防水性のある新しい素材の研究開発が進められている。
- ・ 浸水対策：歩行者の通行を確保するため、水際部分の床（河岸）を高くするなどの対策が取られている。

○異常気象対策

ヴェネツィアはヨーロッパでも竜巻の発生頻度が高く、夏の激しい雷雨やダウンバーストも頻繁に発生する。1 時間に 360～400 ミリという記録的な降雨に見舞われることもある。これに対し、主に本土側からの河川の水をコントロールし、ラグーンへの土砂流入抑制や洪水対策を目的として、沈砂池（vasca di laminazione）の整備が進められている。

○工業地帯の環境対策（ポルト・マルゲーラ地区）

ポルト・マルゲーラの工業地帯からの汚染物質がラグーンに流出するのを防ぐため、以下の対策が実施されている。

- ・ 縁取りと配管システム：汚染物質の流出を防ぐための縁取りを設置。また、地下水や初期降雨を収集し、処理システムへ運ぶ配管システムを整備している。浄化された排水は直接海に排出される。この統合システムは PIF（プログラム・インテグレート・フシナ）と呼ばれている。
- ・ 再生可能エネルギーへの転換：国営炭化水素会社エニは、化学部門の危機を受け、行政の指示のもと、再生可能エネルギーと持続可能な燃料の部門を開発した。ヴェネツィアには製油所のグリーン転換の最初の例がある。

②オーバーツーリズム対策

ヴェネツィアは世界的な観光都市であるが故に、オーバーツーリズムが深刻な問題となっている。これに対し、以下の多角的な対策が進められている。

➤ 入市税（アクセス料）の導入

観光客の流入をコントロールし、都市の持続可能性を高めることを目的として、

入市税が導入された。

- **経緯：**国際的な機関（ユネスコ等）からの要請を受け、2018年にイタリアの法律でアクセス料の導入が可能となった。広範な議論と情報システム構築を経て、2023年に29日間の試験運用を実施。2024年は54日間に拡大し、金曜日も対象となった。
- **料金体系：**訪問日の4日前までの予約で5ユーロ、3日前からは10ユーロ。
- **システム：**SPID（デジタルID）によるオンライン登録とQRコード発行。指定日にはコントロールシステムで登録状況を確認。違反者には罰金が科される。
- **税収の使途：**システムの維持管理費（人件費等）に加え、住民が負担する廃棄物税の軽減に充当し、市民サービスの向上と都市の住みやすさ向上をめざす。

➤ **観光客の分散化**

特定のエリア（リアルト橋～サンマルコ広場）への観光客集中を避けるため、以下の施策が取られている。

- **新規宿泊施設の制限：**歴史的な中心部での新規ホテル建設を許可しない都市計画規則を制定。B&Bなどの観光宿泊施設の普及も制限し、住民の居住空間を優先する。
- **新たな観光ルートの開発：**本土の他自治体と連携し、美食、環境、サイクリング、乗馬など、ヴェネツィア中心部とは異なる魅力を発信する新しい観光ルートを提案。
- **文化施設の分散：**本土や他の島々に博物館を新設したり、既存施設で重要な美術展を企画したりすることで、観光客の誘致を図る。ビエンナーレの会場として、本土の旧軍事施設（フォルテ・マルゲーラ等）も活用。

➤ **商業の質的向上**

安価な土産物店が増加した反省から、伝統的な手工芸品の店舗を誘致し、商業の質的向上をめざす。

➤ **情報収集と計画**

スマートコントロールルームなどを活用し、人の流れをリアルタイムで監視・分析。そのデータに基づき、年間を通じたイベントや行事のスケジュールを調整し、混雑を平準化する。

③市民保護と防災体制

自然災害や緊急事態に備えるため、市民保護体制の強化が図られている。

➤ ボランティア組織

➤ 市民保護においてボランティアは基本的な役割を担う。ヴェネツィア市直轄で 230 人、広域では 2000 人を超えるボランティアが活動。

➤ ボランティアの役割

➤ 予防活動、住民支援（情報提供、援助）、緊急時の救助活動（避難所設営、医療補助等）。

➤ 市民への啓発

➤ 日本の事例も参考に、地域のリスクや災害時の対処法について市民に周知徹底。情報に通じた市民は、自助・共助の担い手となる。学校や市民集会を通じて情報発信を行う。

➤ 緊急時対応計画

➤ 市の計画に基づき、緊急時の情報収集、資源配分、各機関の連携などを統括するコントロールセンターが機能する。個人認証システムも導入されており、迷子捜索などに活用された実績がある。



④都市インフラの維持管理

➤ 水道管の更新

1870 年に敷設された旧式の水道管の交換作業が進行中。新しい水道管は、市中心部の建物の地下にある貯水槽に接続され、市全体に飲料水を供給する。

➤ 下水道の整備

歴史的に自然浄化に頼っていたヴェネツィアだが、近年、下水道システムの整備が開始された。生活排水を処理するための排水管の敷設が進められている。

➤ 廃棄物処理

ヴェネツィアの特珠な環境（狭い路地、水路）により、ゴミ収集は非常に手間とコストがかかる。観光客によるごみ投棄も深刻であり、入市税の税収の一部を廃棄物処理費用に充当し、市民負担の軽減を図る。

⑤予算と財政

ヴェネツィア市の年間予算は、市の税収に加え、EU からの PNRR（国家復興再生計画）資金、および国の特別法に基づく交付金など、複数の財源から構成されている。これらの財源は、インフラ整備、文化財保護、環境対策など、多岐にわたる分野に活用されている。特に 1973 年制定のヴェネツィア特別法は、長年にわたり市の財政を支えてきたが、近年はモーゼプロジェクトへの支出が大きかった。今後は、下水道整備などのインフラ投資にも重点が置かれる見込みである。

⑥広島県が参考にすべきこと

山積する都市課題を解決すべく、2020 年からスマートコントロールルーム（SCR）が活用されている。人流、交通、環境、セキュリティー、エネルギーなどの多様なデータをリアルタイムで収集分析し、オーバーツーリズム対策、防災、防犯、エネルギー管理などが行われているとのこと。広島県においても、あらゆるデータを一括で処理分析を行うための基盤づくりが急がれる。



コラム③ ～複雑なイタリア人の国民性～

アグリツーリズモで訪れた家庭では、強固な家族の絆を実感しました。一方で、通訳の方が地方都市の出身であるため、偏見や誤解に直面することがあるとの話も聞きました。さらに、イタリア全土にはボランティア組織が発達し、災害時などには地域を超えて助け合う文化も息づいています。家族愛、地域愛、連帯感が交錯するイタリアの国民性は、どのような歴史的背景から形作られてきたのか調べてみました。

●家族の絆

古代ローマの「ファミリア」は血縁者だけでなく、クリエンテスや奴隷を含む広範な社会経済単位であり、家長「パテル・ファミリアス」が絶大な権力を有していました。この家族中心主義の伝統は現代イタリアにも受け継がれ、家族は精神的・経済的支援の主要な供給源であり続けています。多世代同居や、経済的に困難な状況下での相互扶助は、その典型と言えるでしょう。中世以降はキリスト教の影響が強まり、結婚は宗教的儀式としての性格を帯びるようになりました。聖母マリアや聖人への信仰も、家族や共同体のアイデンティティ形成に深く関わっているようです。

●地域主義の深化

古代ローマは「分割統治」システムを通じて多様な地域を支配下に置きつつも、一定の地方自治を許容しました。西ローマ帝国崩壊後、イタリアが1861年に統一されるまでの長きにわたり、半島には多数の独立した都市国家「コムーネ」が興隆し、それぞれの地域で「カンパニリズモ」（郷土愛）の精神が深く根付きました。この長期にわたる政治的分裂状態が、現代イタリアにおける多様な方言や食文化、そして南北間の政治的・経済的差異といった、根強い地域主義の歴史的背景となっているようです。

●連帯の歴史

イタリアにおける相互扶助の伝統は古く、古代の隊商協定や中世に広まった「俗人宗教兄弟会」にその萌芽を見ることができます。これらの兄弟会は、教会の祭壇に集い死者のための代願を行うといった「霊的救済」を本来の目的としながらも、「慈悲（carità）」の理念に基づき、病者や失業者への「物質的支援」も提供しました。国家による福祉制度が未発達だった時代において、これらが社会のセーフティネットとして機能していたのです。現代イタリアにおいても、「アソチアツィオニズモ」と称されるボランティア活動の精神は力強く息づいています。特に自然災害などの緊急時には、ボランティア組織が迅速かつ広範に活動することに繋がっているようです。

